

続

韓国文化を学んだ中央大学文学部学生による寄稿、『韓国文化から学んだこと』第2弾。
4年生の古浦桃衣さんは「まずは知ること」と提言する。

韓国文化から学んだこと

文&写真 古浦 桃衣 (文学部4年)



韓服は簡単に着ることができるのが魅力的。
綺麗な刺繍が施され、着心地も良かった。
上が筆者の古浦桃衣さん、下は友人の湯原夕希さん。

2016年11月上旬、4日間の韓国旅行。これまでも何度か韓国を訪れたことがあるが、今回の旅行ほど韓国文化を感じ、韓国と日本のつながりを意識させられた旅行はなかった。

「やっと一緒に韓国に行けるね!」。夏休みが終わろうとしていた9月中旬、およそ3年半越しの約束がかない、友人との韓国旅行が決まった。

友人から提案があった。学部主催の韓国アートや韓国ドラマをテーマとしたシンポジウムと、シンポジウムのプレ企画「学内セミナー」に参画しようという。

私は「大の韓国好き」であるが、単にアイドルや食べ物、観光が好きなかだけ。韓国の芸術は何一つ知らなかった。

「こんな私が学内セミナーに参画するなんて、できるのだろうか…」。止めどもない不安を抱えたまま、友人と学内セミナーに向けてあれこれ準備をしているうち、あっという間に韓国訪問の日が来てしまった。

旅行中、運命的な出会いがあった。路上で販売している雑誌『ビッグイシュー』を新村でたまたま購入し、カフェでぼらぼらとめくっていたときだ。

偶然にも、学内セミナーで紹介する予定の、朝鮮王朝後期の絵師2人、申潤福と金弘道の名前をページの隅に見つけたのだ。

記事は国立中央博物館(ソウル市龍山区)で朝鮮王朝時代後期から近代までの美術作品を展示中との紹介。「これは行くしかない!!」。急ぎよ、私たちは翌日早朝から博物館へ向かうことにした。

展示作品は絵画から骨董品までさまざま。朝鮮以外にも、当時の中国や日本の人々の暮らしを描いた作品もあり、改めて、古くから韓国と日本につながりがあったことを感じさせられた。

恥ずかしながら、美術に関してはこれといった知識がないため専門的なことは分からなかったが、申潤福と金弘道の作品に魅入った。

両者の筆遣いが異なるのか、同じ風俗画でも優しい線で繊細な申潤福の作品と、力強い線で生き生きとした金弘道の作品を見比べて、「金弘道のほうが、日常が楽しそうに見えるから好き」などと、友人と話しながら鑑賞するのは楽しかった。

展示会を見つけたことで、彼らの



国立中央博物館の「アートの中の都市、都市の中のアート」展のポスター

作品を自分の目で見て、感じることでできたのは、学内セミナー開催に向けてとても貴重な勉強になった。

◆ 若き詩人の思いに涙

「セミナーのためにも、せっかくだから勉強も兼ねて韓国に行きたい!」。友人のこの一言もあり、私たちはセミナーを担当する教授が教えてくださった、尹東柱^{ユンドンジュ}という詩人の文学館(尹東柱文学館、ソウル市鍾路区)を旅行中の行き先の一つに決めていた。

小さな文学館の中に入ると、そこには当時の写真が飾られ、ケースの中にはたくさんの尹東柱直筆の原稿が展示されていた。原稿はところどころに漢字が見られるものの、ほとんどがハンゲルだ。

「もっとしっかり勉強してくればよ

かった…。勉強不足を痛感しながらも、内容が分からない原稿を一行一行、じっと見つめると同時に、ふと、事前に学んだ彼の生涯が思い出された。

日本に留学中、祖国の独立を望み、母語で詩を書き続けるも、嫌疑をかけられ獄中で亡くなったのだ。まだ27歳という若さだった。

人が母語を、母国の文化を奪われるということはどういうことなのか。私は彼に出会うまで、考えたことすらなかった。「どんな思いで、朝鮮語で詩を書き続けたのだろう…。」原稿を見つめながら、ただただ、想像するしかなかった。

展示コーナーを一通り回った頃、ガイドが「閉ざされた井戸」という、映像鑑賞ができる場所に案内してくれた。

そこは尹東柱が収監されていた福岡の監獄をイメージしたそうだ。高い天井に、無機質で冷たいコンクリートの壁に囲まれた部屋。中は薄暗く、重々しい空気が漂っていた。この空気に、私は部屋を出たくなった。

映像は尹東柱の一生を紹介する内容だった。薄暗い部屋の中で、ナレーションの音が響く。もちろんナレーションは韓国語。完全には理解できなかったが、映像を食い入るように観続けた。

「私はいま、母語を奪われることも、他国の言語を強制されることもない。それに自分の意思で自由に外国語を勉強できる。これって幸せなことだったんだ」。そう思った瞬間、映像に映る彼の微笑む姿を見て、思わず涙が込み上げてきた。

私が知らない時代に、日本の地で、一人の若い詩人の母語と文化、人生が奪われた。

その時代を生きていたわけでもないし、そういう時代だったのだ、と思

うしかないのかもしれないが、なんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

尹東柱という詩人に会っていなかったら、いま、私が生きるこの環境がいかにありがたいものであるか、改めて気付くことはできなかったろう。彼を通して、韓国の芸術と日韓のつながりを知ることができたことに感謝しつつも、彼が生きたあの時代が二度と訪れないように、と願うばかりだった。

◆ 韓服を着て文化に浸る

文学館や博物館訪問のほかにも、韓国の民族衣装である韓服を着たり、歴史の詰まった景福宮を散策したりと、韓国の文化にどっぷり浸かった濃い4日間を過ごすことができた。

大学生活最後の年にして、このように韓国の文化に触れ、日本と韓国の関係についてじっくり考える機会を得ることができたのは非常にあり

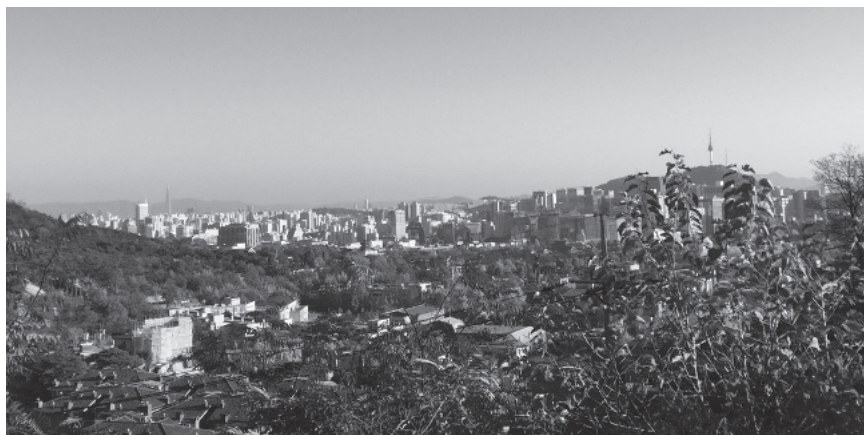
がたかった。

学内セミナーとシンポジウムの開催がきっかけで、私はお隣の国、韓国についても、また、日本についても知らないことばかりだったことに気付かされた。

「どうして日本と韓国はもっと仲良くなれないのだろう」。両国の緊迫感を伝える報道が出るたびに感じていたことだ。

その国を好きになること、その国の言語を勉強すること、その国の友人をつくること。どれも大切であると思う。けれども一人の日本人として、たとえ日本が目を逸らしてしまいがちな過去の出来事があったとしても、その国の過去に何があったのか、日本とどのような関係があったのか、その国を「知る」ことが一番大切なのではないかと、今回の旅行を通して強く感じた。

私はこれからも「まずは知ること」を心に留めて、他国、そして他者に理解ある人であり続けたい。



尹東柱文学館近くの丘から見た風景。右遠くにソウルタワーなどが見える

中大文学部主催のシンポジウム「アートとドラマから見る韓国」は昨年11月12日に東京・中大駿河台記念館で行われた。韓流ブーム以来ぐっと身近になった韓国の現代文化を2つのジャンルから読み解こうというものだった。